令和３年度第２回社会教育委員会議録

■日　時　令和３年１１月１６日（火）
　　午後２時から午後４時まで
■場　所　徳島県庁１０階　大会議室
■出席者　徳島県社会教育委員：１０名
　　馬場委員長、阪根副委員長、泉　委員、加藤委員、児嶋委員、
　　佐藤委員、多喜川委員、野中委員、濱田委員、横田委員
　　事務局：７名
　　教育次長、生涯学習課長、生涯学習支援課長、他４名
■会議概要
　１　開　会
　２　徳島県教育委員会挨拶
　３　議事（１）令和３年度地域教育支援活動奨励賞について
　　（２）今期社会教育委員会議の提言テーマについて
　　（３）今後のスケジュールについて
　　（４）その他

議事（２）今期社会教育委員会議の提言テーマについて

馬場委員長　徳島が活力あふれる地域になるように新しい提言策定に向けて協議を進めていきたいと思う。今、文科省も学校教育と社会教育の連携協働について制度的にも予算的にも力を入れているようであるので、望ましい方向に進めていけたらと思う。

「コミュニティスクール(以後 CS)の在り方等に関する検討会議」が８月に中間報告をまとめている。CS はこれまで、なかなか浸透していかなかったが、高校を中心として設置数が増えている。中間報告のなかでも地域と学校の連携協働というのが重視されており、社会教育側で進めている地域学校協働活動と CS を一体化して進めていくべきとの話が強調されている。

本日は、このような事項も踏まえつつ、日頃から考えておられる課題等をお話していただきたい。

阪根副委員長　私からは山形県の子供議会の話をさせていただく。子供議会を実施している所は多くあるが、山形の事例の面白いところは、子供議会で可決されたことに予算がつき、その予算内で子供たちが活動を行うというもの。

成果について尋ねると、若い人の投票率が全国比較すると圧倒的に高いとのことだった。非常に興味深い事例だと思う。

前回の提言は「幸せ度№１」「ダイバーシティを考える」をテーマにしていたが、今期の提言も馬場委員長を中心に徳島の社会教育推進につながる提言になるよう努めたい。

馬場委員長　前期は「ダイバーシティ」を中心に提言をまとめたところであるが、本日は第２回会議でもあるので、各委員が日頃から抱えている課題意識等を自由に発表いただき、今後の方向性を見出すヒントになればと思う。

前回の会議での主な意見をまとめているので事務局から説明をお願いし

たい。

事務局　第１回会議においては、今期の提言テーマを考えるにあたり、各委員が日頃から生涯学習・社会教育に関わる中で考えておられることや、取組について発言いただだいた。今期委員には家庭教育支援・ダイバーシティ推進・社会教育における ICT 活用促進・防災教育そしてまちづくり等々、様々なステージで御活躍の方々にお集まりいただいており、多様な意見をいただいた。

それらの御意見を事務局にて５分野にカテゴライズした。５分野は「地域と学校」「学び・スキル」「社会教育」「人材育成・支援」「課題」である。

また、今後のテーマ決定に重要となるワードを抜粋し記載している。キーワードとして「有機的ネットワーク構築」「ICT の利活用」「目的課題意識の共有と課題への当事者意識」「ファシリテーションスキルの修養をベースとした生きる力の育成」「次世代人材育成」である。

さらに、「ICT の利活用」「目的課題意識の共有と課題への当事者意識」「次世代人材育成」については、前期提言においても、提言テーマを実現するべき方策としてもまとめられている。前期提言をより良い形へと発展させ具体化できるよう、また新たな提言テーマにつながる協議をお願いしたい。

馬場委員長　前回提言と第 1 回会議の説明があった。また、先ほど国の動向について述べたところであるが、最近 Zoom を使いながら各地の地域学校協働活動のコーディネーターやファシリテーター養成研修に関わっている。その折によく「私たちは協力したいが、学校側が昨今の社会情勢を鑑みシャットアウトしてしまっている」といった声を聞く。地域としては協力したいが、コロナ禍の中で、なかなか学校サイドがコロナ禍前のように地域人材を学校に受け入れるという体制にはなっていない。学校の教育課程そのものを進めことが最優先であることは十分理解できる。しかし、教育の質を高めるという意味でも新しい学習指導要領に則った展開をしていく上での手法を考えるべきだと思う。

前期の会議の中で「ICT の活用」についての事例として Zoom を使いながら親子料理教室を開催したところ関心が高く成果があったという事例が紹介された。徳島は ICT の先進県であるはずなのだから、次期提言では新しい方向性を示していければと考えている。各委員にはアイデア出しをお願いしたい。学校で直接子供たちに関わることが難しい時代であるが、予防策を講じながら他府県においても多様な取組が実施されている。ある論文では、コロナ禍における小学校での九九の学習への工夫事例が紹介されていた。幸いなことに徳島は光ケーブルが全県的に整っており、加えて ICT に強い高齢の人材もいる。そのような環境人材を活用しながら社会教育の新しい方向性を徳島県が先駆的に進められればと思う。

また、ICT に限らず多様な意見を各委員からいただきたい。そして、ネットワークに関する意見は毎回出されているところ。活動は個々に活発に実施されておられるが、横のつながりを形づくるのが難しいのが現状。だからこそ、機会ある度に協議し進めていくべきだと思う。

阪根副委員　実は、私の妻は香川県で長年、社会教育に携わっている。香川県におい

長　ても、昨年はコロナ禍のため諸々の事業が延期や中止になり、事業実施に苦慮していたので Zoom を活用し海外を探求する講座の企画をアドバイスした。企画スタート時はノウハウも部局間の連携も無く苦慮したようだ。プラットフォームを作ることが必要なのだが、行政も我々も苦手とする部分である。プラットフォームを作るために、この事業では、初めに「高齢者向け Zoom 講座」を開設、若い世代や学校の退職教員が講師を務めた。高齢者の Zoom へのニーズも高く、熱心に受講されていたようだ。

その後、Zoom を活用したオンラインツアーを企画し、トルコやサハラ砂漠などを繋いだり、トルコ料理教室を開催したりしており、注目すべきは、市庁舎内の他部局の職員の協力体制も整い、横の繋がり、ネットワークが構築されている。ICT が軸になってプラットフォームができた素晴らしい事例だと思う。

徳島は NPO の活動も活発で素晴らしいが、横の繋がりが無いために他団体の取組を知らないケースが多い。今回の提言では是非、良い意味での社会教育プラットフォーム作りに言及すべきと思っている。そしてプラットフォームとして最適なのは学校ではないかと思っている。CS 的な視点から取り組めるアイデアを各委員が出し合ってみてはいかがかと思う。

馬場委員長　貴重な御意見をいただいた。今の時代だからそできることが有ると思うので、様々な視点からの御意見をお願いしたい。

泉委員　私は ICT を活用した多様な働き方を推進する団体を運営しており、日頃からオンライン研修を行ったりしている。先刻も話題にのぼっていたが Zoom の初心者講座等を開設すると大勢の方が参加している。

ただ、オンラインを通じて繋がりを構築する人は世界が無限に広がっている。オンラインを活用する人と一方で IT に馴染めず、ニュースソースも新聞やテレビ等従来の情報源に限定されている人の二極化傾向が顕著になっていることが気がかりだ。

また、先ほど審査した地域教育支援活動奨励賞候補に認められた個人団体は伝統や地域の繋がりを守っている素晴らしい活動をオンラインの時代にどのように組み込んでいけばよいのだろうか。オフラインとオンラインをうまく組み合わせる方法を考えていかなければ、さらに二極化が進むのではと懸念している。ICT 活用を推進するには専門家の力を借りるのがベストだが、高齢者や ICT に馴染みの薄い方を ICT 指導員に養成し、次のステップとして地域の方に広めていただく。時間を要する取組かもしれないが、そこを切り開いていかなければ二極化の問題は解消しないのではないかと思っている

馬場委員長　情報格差に関する問題は早急に取り組むべき課題。葉っぱビジネスで有名な上勝町のように ICT に強い高齢者が多い地域もあれば、そこには全く及ばないエリアも沢山ある。ハードルの高い最初のチャレンジをどのように克服していくか、その方策を考えられたらと思う。

加藤委員　親の立場から ICT に関する意見を述べたい。これまで、自身の子供達には英語をしっかりと身に付けてほしいという思いをもっていた。子供は英語を学びなさいといっても、なかなか学ばないのだが、 誰かとしゃべりた

いという意思が発動すると自分から主体的に学び始める。ICT を活用し英語を話すアフリカの方と繋いだ。ボディランゲージというのか、話せなくても会話することが楽しい。もっと話せたらいいのにという思いが子供の中で高じ、英語検定でも良い成績を残した。「英語の勉強」という捉え方ではなくコミュニケーションツールとして捉え学んでいた。ICT を活用し効果的だと思った例である。

これを徳島に応用してみる。前回会議で「徳島は外から見ると素晴らしいところ」と発言した。やはり「徳島の内」だけ見ているとその良さは分からない。ICT で徳島の外、国内でもよいし、国外でもいい。繋がってみたい面白い繋がり先を行政や NPO が中心となって紹介していく活動があれば、徳島の人は徳島の魅力を再発見し、徳島の外の人は徳島の魅力を新発見することができる。このような ICT の活用方法があっても面白いと思う。

馬場委員長　面白いアイデアをいただいた。最近のＮＨＫの語学番組は随分と変わって来たと思う。実際の日常の場面を想定した番組で、堅苦しくなく楽しみながら拝見している。ICT も楽しみながら学ぶという環境からスタートすることも大切なのではないかと思う。

児嶋委員　私の知人が最近、神山に折り紙のギャラリーを開いた。大阪で IT 会社を経営する御子息が神山で古民家を借りて２階を支店にし、１階スペースをギャラリーにしている。このように、先進的でかつセンスの良い取組が沢山展開されているが、牽引される方がいるのか知りたいと思っている。

県内では上勝が全国的に注目されており、おばあちゃんたちが PC で受注をしている光景がニュースで取り上げられてきた。上勝の事例は横石さんという方がリーダーシップをとり牽引した。活動が一気に広がりを見せるにはリーダーとなる方の存在や行政の力が無いと難しいのではないかと思うのだが、神山の取組が活発な要因を教えていただきたいと思う。

また、短大で教鞭をとっているが、コロナ禍が学生たちに及ぼす影響を強く感じている。今の２年生は入学直後から２か月大学に通えなかった学生たちであり、短大生であるので２年生は最終学年となる。対面とオンラインの繰り返しで仲間意識が芽生えにくく、何かに取り組む時もリーダーシップをとろうとする人が、なかなか出てこない状況であった。12 月の子供のためのイベントを控え、最近になってやっと自分たちで主体的に動こうとするようになった。必要とされることがないと主体的には動けないのではないかと感じた。昔から学生たちの中には、学習意欲が高く積極的に経験を積み、キャリアを切り拓いていく人がいる一方、大半の学生はそうではない。しかし、このような学生も必要とされることが契機となって、動き出すことができるのではないかと思う。もちろん、ICT は必要なのだが、やはり人と人が顔を合わせ、自分が動かなければ困る人がいるという状況を体感できる仕掛けが必要だと最近強く感じている。

馬場委員長　「仕掛け」をどのように作るかが重要なポイント。神山はグリーンバレーの大南さんが牽引されておられる。

阪根副委員長　大南氏らが中心になって高専を誘致し新たな取組を展開しようとしているようだ。素晴らしい取り組みである。このように神山の事例も含め、上

勝のゼロ・ウェイストの事例も素晴らしいことだと思うのだが、どうも特定のエリアだけの取り組みになりがちである。徳島ならではという点では、他地域への広がりについて幾分課題があると思う。従って、多様な人材の交流は非常に重要なことだと思う。

馬場委員長　せっかくの取組を広げられる方策を見いだせればと思う。

佐藤委員　私はスマートフォンを活用し主婦と高齢者をつなげる仕組み作りをしている。少し遡るが、私の企業アイデアが経産省等が主催する指導イノベーターというプログラムに採択され、現在ブラッシュアップ中である。この選考へのエントリーは地方からは難しいのだが、オンラインのおかげでエントリーできたと思う。そして、その折に感じたことは地方と都市部との学習機会や IT の活用格差である。徳島の IT 環境が評価されることが多いが、決して進んでいるとは思わない。Zoom 講座等でフリー Wi-Fi に３人以上が接続すると非常に不安定になるので、インフラ整備は充分ではない状況だと感じている。

また、NPO 等との繋がりを作っていきたいと考えている事業がある。簡単な困り事を助け合うマッチング事業を展開したいと思っている。その中に、IT を教えるカテゴリーもあるといったイメージで広げていきたいと考えている。現在調整中であるが、試験展開候補地として上勝・神山・木頭・日和佐を想定している。

馬場委員長　各地の取組を牽引されておられる方々は、今、ブランドになってしまっている。もう少し横展開があると良いと思う。「徳島といえばこの方」と限定されてしまっているが、全体の底上げにならなければならない。

多喜川委員　前任の津乃峰小学校の取組を紹介したい。津乃峰小学校は２０分で３０cm の津波が、そして５０分後には５．８ｍの津波が到来すると想定されている。塩田がベースの軟弱地盤の上に建っているので、避難についても困難を伴う学校であったので、地域との訓練、自主防災会も非常に熱心であった。しかし、コロナ拡大後は、子供たちを集合させて訓練することが難しくなった。去年９月 1 日シェイクアウト訓練をオンラインで実施した。主催としては開催に消極的だった。町内でクラスターが発生するなど感染リスクが高まっていた時期であり、保護者からは津波への防災訓練を優先するのかコロナの感染リスクを避けるのか、様々御意見をいただいた。

そこで、オンラインでの訓練を計画をした。Zoom で各教室を繋ぎ児童らの避難する様子を校長室から観察し、これまでの訓練では発見できていなかった課題を見つけ、児童らにフィードバックすることができた。また、当日は報道関係の取材があり、後に訓練の様子を繰り返し放送していただいたことで、学校への安心感が高まった。さらに、近隣の防災教育に力を注いでいる学校とも連携し、オンラインで防災研究の発表会を実施することもできた。ICT を活用したことで一層の広がりができたと思う。

また、南海大地震を体験した高齢の方からの聞き取りも、コロナ禍の感染リスクを鑑み Zoom を活用し実施することができた。さらには、東北の震災から 10 周年を迎えた昨年は、日赤の主催するオンラインイベントにも参加することができた。児童にとっては貴重な経験となったと思う。

一方で、バランスが重要だとも感じている。オンラインと対面の配分を工夫し、今後、社会に出ていく子供たちをサポートする環境を作らなければならない。

先ほどより、上勝・神山の話題が上がっているが、私も神山の分校での勤務経験がある。現在は廃校になっており、２校が残るのみとなっている。どのような仕掛けがあれば、定住する人が増えるのか。阿南市も同様に、学校の統廃合が進み非常に厳しい状況になっている。各委員の話を興味深く拝聴した。

馬場委員長　非常に示唆に富む話であったと思う。ICT は万能ではない。上手く活用する手法を考えていかねばならない。 私も現在、国立社会教育実践研究センターで調査研究をやっている。社会教育主事講習を ICT を活用して実施できないか。オンラインとオンデマンドとをどのようにブレンドすべきか。といった調査研究を行っている。ICT は万能ではなく、利用にあたっては技術的・環境的な課題も多い。今後それらは改善されていくと思うが、社会教育は対面を重視してきた教育活動であるので、原則は大事にしつつ ICT を上手く活用すべきだと思う。

野中委員　生涯学習・社会教育の包括支援体制を整備すべきと考えている。ICT を駆使した関係機関のネットワークの構築、デジタル・グリーン社会の整備といったハード面と事業費確保、社会教育キーパーソンの育成といったソフト面の整備を両輪で進め、見える化・数値化して、PDCA サイクルを回すべきと考える。さらには、行政・NPO・ボランティア・教育機関・法人等々がまとまりのある共同体を作り、ファシリテーターやコーディネーターが存在する仕組みが必要。生涯学習・社会教育を展開するには ICT も必要だがやはり対面、人が重要になると私は考える。ファシリテーターやコーディネーターの重要性がよく語られるように人材育成は必須の課題。そして、それを実現するには教育が重要だと思う。

さらに、県では実施しているが市町村等への広域性が弱いことや、研修・育成後のフォローが充分でないという課題を感じる。県教委でも様々な教育活動を展開しているが一方通行になっていないだろうか。育成後の環境整備までフォローアップしないと社会教育は進まないと思う。

私が主催した読み聞かせのイベントも、図書館・ボランティア協会・民生委員等の地域の団体を巻き込んで開催した。多様な主体と連携したことは成果であるが、その後のフォローが充分ではなく課題であると思っている。ここが重要なポイントだと思う。

馬場委員長　まさしくプラットフォームだと思う。多様な主体が繋がり学びと活動を循環型にできること、それを持続することが重要。プラットフォームがあれば持続可能な取組を後押しできると思う。

濱田委員　学校をプラットフォームにという御意見があったので、学校の現状を少しお話したい。コロナの拡大で昨年は突然の、さらには２か月に及ぶ臨時休校を経験し、学校の教育活動を精査することと向き合った。子供たちにとって本当に必要なことなのか、実施することが目的になっていないか等、教職員間で議論してきた。「何のために実施しているのか。どのような力

を子供たちに付けようとしているのか。」を最優先に判断し行事を精選してきた。一方で、気がかりは、コロナが収束した時に、カットすることが普通の感覚になってしまわないかということ。必要なことまでもカットするのが当たり前になってしまわないかが心配。加えて、学校では働き方改革が進められているが、「負担軽減・勤務時間削減」と称すれば何事も止めてしまえる流れがある中で、子供たちの将来・地域の将来に必要なものは残していこうと声をあげていく必要があると強く思っている。

社会教育の活動を学校をプラットフォームとして広げていこうと考えた時、「働き方改革・負担軽減」の逆風が吹くと思うが、それを打破するには「何のために実施するのか」を明確にし、共有することが大事だと考える。

そして ICT に関してであるが、穴吹中学校は多くの地域支援ボランティアの方が学校に入ってくださっている。コロナ前は、中学生が講師となって高齢者の方向けにスマートフォン教室を開催しようとコーディネーターの方とも計画していた。人は教わる時よりも教える時に力がつくといわれているので、情報リテラシーを身に付ける絶好の機会と思っていたのだが、残念ながら実現できていない。ICT に関しては、本校でも積極的に取り組んでいこうと思っているが、大きく目立つような単発の活動ではなく、日常の些細な活動の積み重ねを大事にしていきたいと思っている。

先の意見にもあったが、「あの人がいるから、あの地域は進んでいる 」という状況ではなく、誰でもどこでも、いつでもできるようなことをつなげていく視点が必要だと感じている。

馬場委員長　効率を追う時代、切り捨てるということが行われがちだが、ある種の無駄を大事にしていくことも、子供たちの育ちにとって大事なことだと思う。

横田委員　地域連携、CS で頑張っていることと、現在の考えを述べさせていただく。コロナの収束傾向がみられ、学校行事も徐々に戻ってきた感がある。大きなものとしては９月初旬に予定していた体育祭を１０月に実施できたこと。行事を実施して、生徒たちは対面の活動を待ち望んでいたのだということを強く感じた。これまで、リモートで様々なことを実施してきたが、対面開催の体育祭での生徒たちのいきいきとした姿・取組姿勢が素晴らしく、本来の教育活動はこれなのだと思った。

先ほどより、皆様が述べておられるようにオンラインとリアルをバランスよく計画しなければならないと思った。また、コロナの影響で ICT が導入され、ありがたいと感じた事もある。様々な研修・会議がオンラインで実施されたことにより、学校での時間を確保できた。生徒の様子を見、学校運営について先生方と協議することができた貴重な経験である。このことから、要・不要を精選し、リモートへの切り替えの可否の判断力が教育現場では必要とされている。

また、本校では CS を導入し１２名の委員を委嘱しているおり、非常に素晴らしい人材に恵まれたと思っている。CS の第２回会議では熟議を行っていただき、鳴門高校の魅力化に向けて３つのプランが出されたところ。今後は実践に移していきたいと思っている。このようなリアルのありがた

さがあるが、学校としては総合的な探求の時間を活用して地域の伝統を学ぶフィールドワークの実施であるとか、鳴門観光ボランティアガイド会や鳴門市生涯学習人権課の協力のもと、生涯学習・まちづくりに関する出前講座を実施している。鳴門高校は地域の方々に大事にされ支援されている学校。支援いただくばかりでなく、高校生が地域に還元し地域の方とのwin-win の関係を構築したい。このように考えられるのも、馬場委員長、阪根副委員長に御指導いただき、社会教育委員会議の事務局をさせていただいたという転機がある。それまでは、学校教育中心の視点しかなかったところに社会教育の視点が加わることになった。地域活動に取り組む多様な団体の方々と活動する中で世界観が広がったことを覚えている。このことから、学校に社会教育を取り入れたいと生涯学習課での勤務時から考えていたことである。現在、校長職を拝命しているので、常々考えてきたことを実現したいと思っている。

ただし、学校には人事異動があるので、仕掛けを作っておかなければならないと考えている。取組の中心となっていた人物が異動しても、持続できるシステムをどのように作るのかが重要。プラットフォーム作りということが度たび意見として上がっているが、学校内でプラットフォームができることが理想。それを負担感なく先生方にやっていただくには、事業内容を精選し教育効果を見極め、達成感を得られるような取り組み方が必要。

県内 15000 人の高校生のうち、鳴門高校には 900 人弱の在籍がある。非常に責任の重いことであるが、900 名の若い人たちに社会教育の視点を持つように育てられれば、地域の教育力の向上にとって大きなことだと思っている。

馬場委員長　社会教育はこれまで実践して終わりということが多かった。成果の見える化が求められている時代だと思う。特に少子化が進んでいるので、地域に愛着を持ち将来的に回帰してもらうには、若い世代が地域を知るという仕組みが大切ではないだろうか。若者回帰に成功している他府県の事例を見ていて、そのように思った。

泉委員　ICT の活用は、あくまでもツールであり目的ではない。今、DX(デジタルトランスフォーメーション)によって社会は大きく変化している。行政の改革に私も関わっているが、行政や教育のデジタル化は非常に難しいと感じている。逆にビジネスやエンタメの分野は大きく変わっていくと思う。

学校教育では GIGA スクールが一気に拡大しているが、必ず人と人の繋がりの重要性に戻ってくると思うので、自身の活動もデジタルの活用の部分と人と人の繋がりの両面を大切にしつつ活動したいと思っている。

加藤委員　IT リテラシーの話をさせていただきたい。ネットから様々な情報が簡単に入手できるようになり、情報の真偽を確かめることが非常に難しくなってきた。ネットを使った有料サロンビジネスのようなものも起こっている。ある意味、現代版の新興宗教のようなものである。その中で、何を子供たちに伝えていけばよいのかが難しくなっていると感じる。

そのような中、いくつかの NPO では、様々なニュースや週刊誌、口コミに出ていることが事実か否かをチェックする「ファクトチェック」の活動

を展開しているところがあるので御紹介しておく。

児嶋委員　コロナ禍で苦労はしたけれども、見直す機会を得られた。対面参集の参観日や発表会の在り方を見直し、普段の子供たちの様子を配信する方が喜ばれたという経験・気づきもあった。アフターコロナも、ICT を上手に使いながら対面での人と人との繋がりを充実させていく必要がある。

また、失ったものを回復していくという作業もあると思う。学生を例に出すと、意欲が低下している所から引き上げて、主体的に経験値を高めていけるような取組が必要だと思う。

佐藤委員　最近、起業をしたのだが、毎日が学びの連続である。お金の教育を例にとると、日本では貯金や現金払いが美徳のようになっており、電子決済が進まず、世界からだいぶん立ち遅れていると思う。巻き返しを図り世界に通用する人材を育成しなければならないと思っている。各委員の意見をお聞きし、社会教育の視点からもできることに取り組みたいと感じた。

馬場委員長　先ほどのお話にもあったが、英語で学ぶことのできる力が求められるようになってきた。国際競争力を付けるにはトライしていかなければならないが、失敗も受け入れながら身近な所から地道に始めていくことも大切にしていかなければならない。

多喜川委員　各委員の意見を伺い２つ考えたことがある。一つは、アフターコロナの社会についてである。本校では運動会に人数制限を設け、学年により時間帯を決めて実施した。運営の方法を変え、保護者が子供たちの競技する姿をじっくり見ることができたというメリットも有り、保護者からはコロナ後も従来のテントを据えて、親族に集まってもらう運動会に戻さずとも良いという意見が出てきている。運動会の目的が変わってきているのかもしれないが、アフターコロナの社会は新しい価値観と従来の価値観を共有していかなければならないのではないかと感じた。二つ目は CS についてである。阿南市でも CS 設置は必須となっている。今後１０名の委員を委嘱するようになっているが、集まっていただく限りは、意味ある何かを起こさなければならないと思った。

馬場委員長　先ほど熟議ということが出ていたが、教育目標を共有するためには意見を戦わせ、理解しあうことが重要。そして、それを実現するには人選をどうするかが悩み所である。団体の代表者ばかりでは難しい問題も出てくるので、委員の選び方にも一工夫必要だと思う。

野中委員　私は地域活性化の活動をしている。行政・NPO・ボランティア・教育機関・法人等々の関係者によるネットワークを全県的に構築していければと思う。また、ICT については関係性ができた上で使うべきと思う。

馬場委員長　あくまでもツールということ。上手く使うということが大事である。

濱田委員　本校でも CS を立ち上げる準備を進めようと考えている。どのような人材を選び、組織を作っていけばよいのか期待感を持っている。様々な場面でやはり対話というのは重要。ただ、コミュニケーションは自然発生しないとも思っている。話を始める仕掛けを設定してくことが大事。穴吹中学校では、「生徒と先生がファシリテーターになって主体的・対話的で深い学び」を学校の教育目標に掲げ３年前から取り組んでいる。ファシリテー

ションの中のホワイトボードミーティングというスキルを継続して学び続けている。３年生に感想を聞いたところ、「ホワイトボードミーティングを学んだことで、初めて出会った人にも自分から話かけれるほど成長していることに気づいた」という意見が返ってきた。このことからも、対話のツールを渡していくこと、対話の力を育成することに力を注いでいきたいと思う。

馬場委員長　対面では消極的な人もツールを使うことによって変容していく。教育の力は大事だと思う。

横田委員　人材育成の話は沢山出ている。生徒を育てることも重要だが教員を育てることも重要。もちろんファシリテーション力を付けることも大事。

そのような中で、最近の気づきを一つ話させていただく。県立学校長会の折に生涯学習課が提言の資料を配布し説明されたことは素晴らしいことだと思った。管理職が各校に持ち帰り教職員に社会教育について話す材料・ツールになると思う。学校教育と社会教育が共に進んでいくことは非常に重要なポイントだと考えている。

馬場委員長　これまで、提言をしてきたが学校教育に理解してもらうことは難しい。

県教委も社会教育に御理解のある次長さんが就いてくださっているので、是非、学校教育と連携できるようにしていきたい。

阪根副委員長　今日、お越しの校長先生の学校は前に進んでいる学校だと思う。

これまで、学校教育と社会教育がどういう立ち位置にあるのかが障壁になってきた。私は働き方改革等の講義や講話の中で「学校教育と社会教育のタスク配分だ」ということを話している。さらに、学校・地域・家庭の目的の可視化が必要。そして、可視化のためには話し合うことが必要。

今後、提言をまとめていくことになるが、課題も見えてきたところ。若者が主役になる社会教育とは何かを考えていくのも良いと思った。

馬場委員長　生涯学習の原点に立ち返ることが大事だと思った。

本日の協議は終了としたい。